

堀田善衛『聖者の行進』を読む

——全集の編集をめぐる——

山下 宏明

一 はじめに

歴史に関心が深い堀田善衛の『聖者の行進』と言えば、どのような世界を想像するだろうか。一九九三年の新全集、第八巻がおさめる『聖者の行進』に、前回、この論集で取り上げた「酔漢」をおさめていた。ちなみに旧全集の第十巻におさめる『聖者の行進』は、ブラジルに入国者したポルトガル人と、原住民、南インディアンとの物語である。一九七一年四月に発表している。しかも、その「聖者の行進」に続く形で「酔漢」をおさめていたのを新全集は『聖者の行進』の中に取り込んでいたのを気づかなかった。弁解の余地なく、わたくしの誤りであった。旧版の全集に一篇の短編として掲載、それが新版の一九九三年十二月刊行の新全集では、「酔漢」を『聖者の行進』の冒頭におさめていたのを教えてくださった丸山珪一氏に感謝する。堀田が中学時代を過ごした金沢の地に丸山氏ら「堀田善衛の会」が持たれ、会誌『海龍』を七号まで刊行している。見落としをお詫びし、新版全集の『聖

堀田善衛『聖者の行進』を読む(山下)

者の行進』が「酔漢」をおさめた訳を考える。

堀田は一九七七年夏からスペインに居を移し、新全集の『聖者の行進』が一九八〇年の「方舟の人」^{はこぶね}、八三年の「カルマニョーラ」^{メノツキオ}、翌八四年の「至福千年」をおさめた。「西欧キリスト教に対する関心から書かれた」ものである。

どういう訳で「酔漢」を、その『聖者の行進』におさめることになったのか。上述の発表順に従って七篇を読む。堀田にとって「読む」という行為はいかなるものか。

二 砂礫に襤褸の僧衣で叫ぶ聖者に従い行進する人々

新版全集第八巻におさめる『聖者の行進』の結びに置かれる「聖者の行進」は、早く『文芸』一九七一年四月号に掲載、一九九三年版新全集におさめる表題のきっかけになった作品である。

舞台はポルトガルの厳しい地。「身は痩せ衰え」、襤褸の僧服に、蓬髪、砂礫になる寸前の「砂礫の荒野」を巡礼杖に身を託し

「跛をひきながら歩いて来た」、次第に「死斑があらわれはじめていた」元「教区顧問」のアントニオ師は、さながら古代キリスト教の「聖者」、かれを逐って襁褓姿の人々が続く。ひたすら歩くアントニオが「世の終焉」「黙示」を予言し、見捨てられた「最後の聖なる土地」カニユドスの村落址を志して「われに、続け！と叫び行進する。カニユドスとは「管、筒、巻き毛」の意であるが、俗語としては「騙す、あるいは失望させることにあてられた」のだと堀田は言う。「悪徳も、殺人も、乱淫も」「おのれの眼に一滴の涙を流す」ことができれば「一切が許される」地であり、十数人の一行が「たちまち千人を越え」、この廢村に「至尊なる会堂」を築こうとする。

南米「北西内陸の未開地」のカティンガ(叢林)には、ポルトガル語で「叢林と言いながら地上は、とげとげしい棘」、巨大なサボテンの怪物が、その地下に「直径十メートル、二十メートルもにわたる広さをもつて盤踞」するが、その「地(上)は尽きせぬ貪欲をもつた太陽に貪られて次第に砂漠化して」ゆく。これらは何を寓意するのか。「内陸北東部からの烈風が」「時に撰氏六十度に達する大地表層部の熱が旋風を呼ぶ」中、贖罪の苦行を続けるかれらは倒れる前に、みずからを葬るために大きな穴を掘らねばならぬ。「二千五百万の人間に」とつて、「生は堪えがたい流刑であり、死は解放であった」。平原のペルナブウコ pernabuco 州にある、「巨大な岩のみによってなる無人帯」。そこへ(ポルト

ガルの)教区顧問アントニオ師が現れ、群り集った母親たちが「嬰兒を両手に高々とさし上げ」、その嬰兒たちの血が岩を染め、「血溜りて形成する」。この惨劇が幾度も演じられ、この原住民族の夢に入り混って来た、南米征服のポルトガルの白人の血が「無限の乱数をもつ混血が生じた」と堀田は語る。

「想像をしてみてもほしい」とは、堀田がよく使う読者への語り掛けである。「四世紀、あるいは五世紀の歳月にわたって、白人たちが徒党を組んで」乱入しつづけた。年表によれば、一五〇〇年、ポルトガル国王の命令によりインドに向かっていたカブラルがブラジル海岸に漂着し、ポルトガル領を宣言、一五三二年にポルトガルの入植が始まって以来、四、五百年にわたって、「エメラルド宝石の山を求めて、あるいは鎮魂を求めて」入植、「原住民各部族(インディオ)との乱淫の結果だけが残され」現在に至ると言う。白人にとって「未開野蛮の」地を(カトリックが)「教化すべく、砂礫の地を踏み越えて入って来た僧侶たち」との乱淫の結果が残された。

原住民であるインディオと「混血に混血が重ねられ」た。「但し、他の交流は不可能であったから、半ば永遠の同質混血で」「このあまりに広大にして……無辺の地に閉じ込められた」。宗教がそこに目をつけ、この「内陸孤島に、天国を築くことが目論まされた」。「僧侶司祭が」ポルトガルから「王の勅書を得て」渡来し「人々の絶対服従を要求」、「その裏腹をなす腹背の暴力社会」が

「執念にこりかたまった暴力社会」をなした。「村の一軒一軒が」敵対していた。「牧畜領主は、つねに身のまわりにピストロースと称する護衛をもたねばならず」、「人は自由を求めて警察国家をつくるにいたり、天国を求めて地獄を創り出す」。「僧侶司祭たちの」「教化の名による圧伏」「もつとも原始野蛮な、しばしば血を見る偶像崇拜儀式」「狂信カトリシズムの」「迷信の数々」も併存、「世にもつとも強固な」「一宗教を形成していた」とは堀田の思いである。

そのあげくにと言うべきか、「十九世紀末、精神錯乱者にして神託受領者、偏執狂者にして聖者、預言者にして悪魔で」あった教区顧問アントニオが「孤立閉鎖地帯のなかでもつとも純潔かつ完璧に維持されて来た地域から」襤褸の僧服を身にまとい、一本の巡礼杖にすがって行進「われに、続け！」と叫ぶのであったと冒頭に戻る。まさに、このアントニオこそ聖者であり、これに従う狂信する人々の「行進」であった。

その巡礼団を討伐しようとカニユドスを目指す軍隊が追いかけるが、道中「乾きと渇き」「熱病」「熱病痛」に「道半ば」「三分の一」の兵を失い、一連隊の全員が赤い土埃のなかで息絶えて行った。「再び、いや二度、三度と政府軍はカニユドス」へと引き寄せられ、その中心となる教会堂が「石造の巨大なものに建て代えられた」。そしてこれを討とうとする兵は、襤褸の一味の手痛い逆襲に遭い、自然の猛威にも死んで行った。特にタミンシン

堀田善衛『聖者の行進』を読む(山下)

ゴ大佐の率いる連隊は、「カニユドスの近くにまで、わざとひきつけられ」「叢林の棘ある木の下」で負傷、そこへ熱風にやられて、その屍が「二十日鼠ほどもある鉛色の蟻や平原のあらゆる動物たちに」食べられる。アントニオ配下の信徒はそれら兵の屍の首をとり、軍隊が着用していた軍袴や将校制帽、勲章を「曠野の棘灌木にひっかけ」、タミンシンゴ大佐の屍は「一本の緑の棘だらけの木に串刺しにされ」軍服の中に残り続けた「十五の勲章」が輝きつづけたと語る。しかしその巡礼の聖地となったカニユドスも今は無く、「乾きの平原の、数百万の襤褸の民は」、二十世紀、ゴム栽培にかり出され、直行距離にして数千キロ西北のアマゾン川の奥へと運ばれ放り出される。ゴムの木をアマゾンの原住民は、「泪する木、と呼んでいた」と結ぶ。元はと言えば、ポルトガルの国王の命により、不毛の地ながら宗教を打ち込もうと使命に燃えた聖者、かれに続く貧民、棄民の行進を語る堀田である。ルシアン・ボダールの『インディアン虐殺』(仏文、未訳か)を主要文献として掲げるが、わたくしは未見である。

三 地下牢に、われこそ『方舟の人』と意地をはり通す

ペードロ・デ・ルナ

バルセローナでの執筆、『別冊小説新潮』一九八〇年一月号に掲載された。

スペインの東北隅に近く、フランスとの国境も近い大都市バルセローナの「地中海沿い」、「エプロ川の大河口地帯」と言えば、奇妙に突き出た、半島とも島とも言えぬ、象の鼻のようなベニス・コーラがある。「ベニス」は男根、「コーラ」は「突出せるもの」のそのまた突端」の意と笑いを誘う。その「高い突端に、長方形の巨大な要塞兼教会の建物があり」「教会と武器庫、広い会議室、食堂などがある」とは異様。「狭い石段を降りて行けば、地下に広大な調理室食料庫、酒蔵なども備わ」る。「その中央には」「深い井戸が掘ってある」、「しかも」である、「その地下一層のそのまた下には、地下牢まであった」とは、いかにも堀田らしく現地を体験した、ユーモラスな語りである。この地下牢に九十五歳の生涯を閉じた「途方もない人物」、俗名ペードロ・デ・ルナが、この城塞に運ばれて来た。それを方舟で運ばれたという伝説のノアにたとえる。人類の墮落に怒った神が起こした大洪水に、妻子とともに箱船に乗り流されたという伝説を踏まえるルナ。かれはアラゴン王国、サラゴースの大貴族で、当時イタリアでは諸侯が対立、「出現した」ローマ法王ボニファティウス九世に対しフランス王が国家の元首として、フランス人をベネディクトゥス十三世として法王の座にすえ、ナポリ王の領であったアヴィニオンに法王庁を建てていた。これにいちやもんをつけるのが神聖ローマ帝国の帝王。各地に戦乱騒擾が続く。そこへイギリスの野盗軍団が侵入、心労の果てに一年そこそこで死んでしまっていたグレゴ

リウス十一世。当時枢機卿であったルナはアヴィニオンに死ぬ覚悟を固める。早くイタリア側の希望でイタリア人のウルバヌス六世が選ばれて座に着くが、枢機卿と争い、クレメンヌス七世を立てる。おかげで教会が大分裂し、クレメンヌス七世はアヴィニオンへ戻る。「ヨーロッパの霊界は」「二人の法王を頂くことになった。以上、歴代教皇表を見て、わたくしなりに整理した。

ローマにいた法王ウルバヌス六世を支持する国々があったが、数々の軍団が荒れ回り、法王は少数の枢機卿を連れて放浪の末、ジェノアに着いたが一三八九年に死去。ローマには新たに「ボニファティウス九世なる法王」が即位し、アヴィニオンでは、クレメンヌス七世が死んだが「統一の談議はついに不調におわらざるをえなかった」とは全く複雑怪奇。皮肉をもこめる堀田の文体に注目したい。

「かくて漸くわれわれの」ルナが登場とは、これも堀田の文体(以下、傍点は山下)。一三九四年、アヴィニオン法王庁でベネディクトゥス十三世として即位。ローマとアヴィニオンに霊界の王が二人。仏・英、それにカステイリア、都合三国の大使の「脅迫、買収、陰謀」の中に、フランス領内の孤島がアヴィニオンの法王庁であった。堀田は、「政治と精神の世界との妥協、非妥協の歴史」が「国王の形をとって蔽いかぶさった」と語る。しかもその法王庁は「数万の軍に包囲され」て五年間も「要塞を兼ねた宮殿」に閉じ込められ、肉がなくなれば、猫も鼠も捕えて料

理され、「法王は猫や鼠よりも雀の方が好いと言っていた」と笑いを込めユーモラスに語るのが堀田のスタイル。頑固一徹の法王は一四〇三年、「平僧に仮装して」脱出、かつて叛旗をひるがえしていた枢機卿や領主をも傘下におさめ、マルセイユにおいて、何と、ローマのもう一人の法王、ベネディクトゥス十三世に大使を送って会談を申し込むが、ローマの法王が「突然頓死」。後を継ぐインノケンティウス一世法王も二年足らずで死去。次なる法王グレゴリウスが逆にアヴィニオンのルナに「和解談合を求め」る。「両者はイタリアとフランスの国境ぶがいの小さな村で鬼ごっこのようなことをして」時日を徒費していたと語る堀田である。パリ大学を中心とした国家公会議、それにローマ側はピサの公会議で二法王ともに廢位処分になると結論。それを堀田は「人の愚劣さに」「底はない」と笑いとばす。「新たにアレクサンデル五世なる者を選出」した。かくて三人目の法王が誕生したとあっては、「法王職の大安売り」だと堀田。三人目も十か月で死去、「ヨハネス二十三世なるものが出て来て」とはこれも堀田のスタイル。フランスがこれを支持、アヴィニオンに住ませようとした。当時、アヴィニオン宮殿要塞を守っていたのがロドリゴ・デ・ルナ。回りからの包囲に抗う。「この間、ベネディクトゥス十三世はバルセロナにいたものであった」とは、これもあきれはてたこの思いをこめた堀田の文体である。おりからバルセロナに猖獗をきわめていた黒死病が、この法王の到着とともにおさまったもの

堀田善衛『聖者の行進』を読む(山下)

だから「法王は聖人として崇められた」。ところがドイツのジギスムントが神聖ローマ帝国皇帝として「唯一にして真のローマ法王の手によって」即位礼が行われることを望んだ。一四一四年、ヨハネス二十三世の名によって開かれたコンスタンツ公会議の風向きが変わり、退位証書に署名を強制され、「これで」「一人片づいた」とは、依然として続く法王問題にうんざりする堀田である。次に登場したグレゴリウス十二世は、ヨハネス二十三世の末路を知って、さつさと退位証書を提出、代わりに「甘い葡萄酒」で知られるポルトガルのポルトオの豊かな司教区を貰い受けた。「さて、最後に残ったのは、わが、ベネディクトゥス十三世」と、冒頭、「地下牢に九十三歳の生を閉じた」法王である。以上、歴代教皇表を見ながら整理してみた。

当時、神聖ローマ帝国皇帝であったジギスムントが、バルセロナに近いベルビニアンにベネディクトゥスを訪ね、新法王選出の選挙会を開くために退位を願うと乞い、国王としての威を發揮しようとした。八十七歳の老法王は、われこそ真正な法王であると居座る。四か月にもわたる話し合いはつかず、俗界の王、ローマ帝国帝王は傷心を抱いてコンスタンツへ戻って行った。コンスタンツ公会議は、民衆の目を怖れて、二回にわたりベネディクトゥス十三世に出頭命令を発した。

しかし俗界の状況は、独・英・仏、それに生まれ故郷のアラゴン王にまで見放され、イタリアにおける支持を失ってしまった。

ベネディクトゥスは開き直って、皇帝ジギスムント以下、コンスタンツ公会議のみならず、「全世界、全人民を破門する」「往古未曾有の破門状を發した」。これを受けたコンスタンツ公会議が四か月間の協議を経てベネディクトゥス十三世を異端との名目をつけて廃位と決定してしまう。当時、ベネディクトゥスは、「三方を燦爛として輝く海に囲まれた岩塊上の城塞」に公会議からの黒衣の使者三人を引見し「此処がノアの片舟なのだ!」と言つてのけ、一四二三年、九十五歳で死ぬ日まで「世界で唯一人の眞のキリストの代理者として方舟の舵を握り続けたのである」と結ぶ。

都市国家群の中に対立する帝国帝王とローマ法王、かれらを取り巻く貴族らの複雑な対立葛藤が奇妙な人間関係を作り上げたスペインにまで拡大していたと語る物語である。あきれはてたとも言うほかない、法王をめぐる葛藤を皮肉をこめてユーモラスに語る堀田である。これらも聖者とするのだろうか。

四 神・キリスト・祭司・法王の位置を主張したメノツキオ

バルセローナで書かれた作品『メノツキオの話』は、『すばる』一九八三年六月号に掲載された。

一五三二年、ヴェネツィア北東の山村、モンテレアーレに生まれた「われわれの主人公」、粉屋のメノツキオとは、読者に語りかける堀田の文体。メノツキオとは背が低い意味だと説くのは堀

田の学習による注釈であり、以下、その人柄を語る上でも有効。風力・水力利用の権限を領主からもらって、永久借地権つきの土地を持ち、抜け目なく穀粒を騙すと農民から疑われた粉屋は、外部から村へ入る村はずれの風車水車小屋にあつて、最新情報の保持者でもあつた。

牛乳をひっかき回しているとチーズが出来、やがて湧く蛆虫に当たるのが天使であつたとするのは、堀田が読んだ、イタリアの宗教学者カルロ・ギンズバーグの論文、*Il formaggio e i vermi*で、その訳が、みず書房から「16世紀の「粉挽屋の世界像」として二〇一二年に刊行されていた。翻訳者の杉山光信は「チーズとうじ虫」の表題を用いている。

メノツキオは、混沌とした中から生まれた、神の遣わしたキリストがユダヤに捕らわれ、磔にされたと人々にしゃべりまくつた。当時、カトリックで禁書であつたらしい俗語で書かれた聖書によるもので、僧職者の位階による権威、法王や司教を認めないと放言、友人の靴屋に、異端視されるぞとたしなめられた。はたして一五八三年九月、五十一歳で告発されてコンコルディアの牢獄に収容され、異端審問を受けることになる。以上が、堀田の語る物語の序である。

メノツキオは死をも怖れず「滔々とその所論を展開し」、儀礼や秘蹟も人間である「お坊さんたちが」作つたもの、キリストの上位に神である聖霊があり、その下にキリスト教徒やその異端

派、さらにユダヤ教もあったと言う。人間を二分し、上位の法王らが「下の者を押し潰す」、「私は良きキリスト教徒として」生きたいと言った。一五四七年にヴェネツィアで大天使ガブリエルがモハメッドに口述したものとして刊行した『コーラン』の俗語訳を読み、英国人ジョン・マンデヴィルの、神が創った全世界を説いた架空旅行としての相対論的な世界像が知性道具論と華麗なイスラム風天国構想に連続していると主張し、「つねによきキリスト教徒で」あることを自覚し、「父と子と聖霊の御名により」自分の意見を述べるのだった。五月十二日、結審、終身刑の判決。

コンコルディアの牢に二年を過ごしたところで、一五八六年、子息が奔走、母や兄弟からの嘆願もあって赦され、モンテレーの水車小屋に戻る。「胸と背の、烙印のような赤い十字架」を身に着けさせられていたが、一五九〇年、教会の世話代表を勤め、一五九五年には課税評価人を選ぶ議員にも選出された。やがて背負わされた十字架からも解放されて自由の身となり、村の子供たちに読み書きを教え、町や村の広場でギターを奏く楽隊屋にもなった。

しかしメノツキオは「おれは（福音書を）信じない。ろくでもないことしか出来ぬ坊主や修道士が他にすることもないので、次から次へとあんなものを書いたのだ」と言い放った。知らぬ間に異端審問所が「秘かに調査を開始」、今回の調査を行った「新任の司祭」は、このメノツキオを「キリスト教徒であり、名誉ある

人」と弁護したが、「楽隊屋として」「出掛けて行った町や村からも次々として彼の意見なるものが通報されて来た」。一五九九年、六十七歳で再び逮捕され、その第一回の審問に、審問官の発言を抑えて、「父なる神様は、自ら愛されておりました様々な子供たち」、キリスト教徒やトルコ人、ユダヤ人などをお持ちになつていて、彼らがおのおの、それぞれの法によって生きるための意志をお与えになった、各宗教が、みずからの信仰を正しいと考えるのであつて、どれが正しいかを知らないと言ふ。審問官は処理に困惑し、「ついに法王クレメンス八世」の直命により処刑されたが、その処刑の方法や日付は不明だと言ふ。

堀田がかつて住んだスペイン、カタルーニア地方の村の牢獄は、二十メートルほどの断崖の中ほどに横穴を穿ち、鉄格子をはめこんだ。「十九世紀半ばまで使われていた」と結ぶ。堀田が扱った史学者ギンズブルグの論文「十六世紀の一粉挽き屋の世界像」によれば、十五・六世紀、ヴェネツィアに帰属するフリウリ地方の貴族の中世的な古い議会のもと、農民の疲弊と反乱が続出。その組織化にヴェネツィア権力との連帯があつたと言ふ。

ローマ教会、聖職者など貴族に貪り採られる貧しい人々、その中の農民としてのメノツキオの主張。教皇や国王・皇帝も信仰的には平等で、聖霊があらゆる人間の中に存在していると言ふ。それを当時のプロテスタントのルター派の思想であるとする説に対して堀田は「日本で、カトリックを旧教とし、宗教改革派、即プ

ロテスタントを新教とする訳し方を誰が一体創始したものか、筆者はつまびらかにしないが、よい加減な訳であると思う」と手厳しい。それにメノツキオは「コーラン」と思われる書も持っていて、キリスト神性を否定するイタリアの再洗礼派が、人は生まれながらにして神から洗礼を受けるとするのは、聖書の略述記やデカメロンなどに由来し、さかのほれば、もっと古い時代からの伝統があつて、農民の間に信仰として定着していたと言ふ。

メノツキオが没収されたテクストの中に一五四七年に出版された無削除版『デカメロン』があり、『聖書の略述記』や『マンデヴィルの旅行記』もあつたとギンズブルグは出典論を出す。メノツキオは人柄として攻撃的で、口頭伝承の文化に接した。これには、口承と文字化の衝突があつたらう、尋問の最後では、メノツキオは神の世には聖女としてマリアがあるように現世では王に對する后があるとした。しかし日常の場では、后妃が聖女よりも上位にあると思つたとも言つた。口頭伝承などに学びながら、日常の生活には秩序を守っていたと言ふのだろう。

審問官との応答の中で、乳からチーズが生まれ、それに蛆虫が生まれるとは、類似によるアナロジーで、カオスの中から聖なる方、神が現れ、この神が天使たちを使って世界を構成していった。キリストを作り、そして別にモハメットやトルコの神、ユダヤの神をも作つたとした。前キリスト教的な民衆信仰のこだまがあるとギンズブルグは言う。

五月十二日に審問が終わり、裁判官へのメノツキオの書簡には、父と子の聖霊の御名においてキリスト教徒らしく生き、ふるまつた。しかし、神とローマ教会の戒律に背いた信仰と行為を行い、偽言と非真理をも行つたと告白もしているが、ローマ教会の現状について悪口をも吐きながら、神聖、崇高なお裁きに御慈愛をと結ぶ。ギンズブルグは、その文字遣いから見て識字力も低い人物であると読み取れると言ふ。読書には熱心な意欲を示し、慈愛に満ちた裁判官を信じ、慈悲を乞うた。現実の裁判官もメノツキオの人柄に同感しながら「ソノ形式ニオイテハ異端デハナイガ実ハ異端デアル」と結論づける。つまり人柄にその信仰心を見ながら、その主張を異端であると結論したとするのがギンズブルグで、堀田は、主張そのものを語ることに力点を置いたと見られる。メノツキオの審査を通じて裁判官自身が論理の構築に苦心、メノツキオという異端に批判を浴び、みずからの立場の確認に迫られた。その思いからメノツキオを、その余命の中に「ローマ教会の胸中に連れ戻さうと」したのが裁判官であつた。審査官は終身刑を宣告したが、メノツキオの息子らの嘆願書、友人らの奔走、保証もあり、不名誉の上着を着るなど条件付きでいったんモンテレアールに帰村することができたのだつた。

この間、順調にマリ聖堂の出納役などへと上り、職務を忠実に実行しながら「心の底では、自分の意見を否定しなかつた」とギンズブルグは言う。キリスト教的な域をはみ出し、古代ギリシャ

の哲学者の説に言及し、瀆神的な言葉を語つたらしい。「神とはひとつのものであり、それはこの世界なのだ」と。創造主と被造物という区別、また創造主たる神という観念はメノッキオにとつて無縁のものであった。「キリストが神であるとしても、それはひとりの人間であろう」と言いながら、メノッキオは自分の疑問が悪魔の誘惑によると弁明もしたのだが、クレメンス八世が直接乗り出して死刑を宣告、メノッキオは「強力な力には勝てず、」

「処刑されてしまった」と語る。

審問官に、メノッキオの弁が認められるには、一七八一年の信仰寛容令が出るまで、「一八二二年の歳月が」必要であったと堀田は語る。ポツカチオに見る「都市知識階級の高度な文化と、地下に底流していた農民文化に、このメノッキオを見ることもできるだろう」とし、審問官らの現実にも対応していたことを強調するのがギンズブルグであつたらしい。堀田は、こうした視点よりも、その異端性を強調しようとしたとわたくしは読む。

五 ヴェネツィアとミラノを天秤にかける 傭兵隊長カルマニョーラ

バルセローナで書かれ『すばる』一九八三年十月号に掲載された『傭兵隊長カルマニョーラ』。

「国際都市ヴェネツィア共和国」とは、イタリア半島を複数の

堀田善衛『聖者の行進』を読む(山下)

都市国家が分断する、その一つのヴェネツィアの町は、半ば海に浮かび、その中心的なカトリック教会「巨大なサンタ・マリア・デルラ・サルデーテ教会」は、一六三〇年から五十七年間をかけて建てられ、その基礎は松材「一五万六六二七本の杭が打ち込まれ」「これがきつく固めて」あるために「ある部分は化石のようになって」、その上にコンクリートが打たれ、カトリック大教会が建てられていると言うのである。

町はアドリア・エーゲ両海に向かつて開かれ、もっぱら国際貿易によって富を得ているために固有の陸軍を持たず、スイスからの傭兵に国運を委ねていた。都市国家の間で経済的に格差がひどい。当然のこととして、各都市国家が対立し、このイタリアの分裂に乗じて隙を狙う独・仏・英といった諸大国が関わって来る。全く「平和は短く、その中間の期間は、ほとんど戦争なのであり」、「されば、諸君がかく欲せられるであろうように、戦火を慎み、また他人に属するものに手を出さず、不正なる戦争を避けられ」る。トルコに対して、六人の提督を以て海戦に備え、「一百万金ドゥカートと二十万銀ドゥカートの貨幣を鑄造し」提督の選擧を促すが、六十二代目(一四一四〜一四二三)の総督のトム・マーゾ・モンチェニゴであるとし、その死に臨む遺言を掲げ、主人公の出番となる。ヴェネツィアと言えば、シェイクスピアの『ヴェニス商人』の町である。

外に向つて開く町に、外からゴート族、これよりも「もつと恐

るべき、フン族・アツチラの劫略が開始され」、「ある種の暗く、悲哀にみちたものあわれを感じさせる」と言う。この水上「砂州の民は、ローマ帝国の滅亡をさへ、余所目に見て生業に励んだ」とは驚きである。その州を物理的に支える松を求め、アルプスの斜面はもとより、ダルマティア地方、ギリシヤ、レバノン、クレータ島、キプロス島等々アドリア海とエーゲ海などの島々や、沿岸地方の野と山をほとんど裸にしてしまった。「現在の日本がフィリピンやインドネシアなどの山々を裸にしているのにも、さも劣らなかつた」と言えば、これは旧稿にも述べた日本の総合商社が、紙の生産に要するバルブ材を買い上げて、マニラ空港への街路樹を丸はだかにしたと語る『19階日本横丁』を思い出す。

外からの侵略を防ぐための傭兵を配備する傭兵隊長には、たえず拡大しなければ他に削りとられるという恒常的な危機があった。特にヴェネツィアにとって、西方のミラノ、北方を怖れるフィレンツェ、それに国外にはトルコの動きがあった。そこへ登場するのがミラノの北西、山地ピエモンテ地方、カルマニョーラ生まれのヴィスコンティ家のフランチェスコ・ブッソーネ、別名カルマニョーラが登場する。著名な傭兵隊長で、この話の主人公である。「勇氣、決断、軍事技術」を以てイタリア一の傭兵隊長の評価を得ていた。堀田は、この隊長を盲目的に信頼することほど「物騒なものではなかつた」と言う。「戦争が商売であるとするれば、それは出来るだけ長引かせるべきものであり、雇用主を徹底

的に搾取すべきるのである」と語るのも堀田の読みである。敵・味方ともに多くが「家族連れで出張しているから」味方はもちろん相手方にも致命的なダメージを与えるのを避ける。雇い主に「陰謀、取引、裏切り、外交、駆引きなどが」あるなら「人民(雇われ兵)の側にもそれがあつて当然だ。それを理解しないで傭兵の誹謗に熱をあげすぎる」『君主論』のマキアヴェルリ、戦争で敵を殺し屋すべきとし、戦争を破壊してしまつたナポレオン、殺し屋の理屈を立てるクラウゼヴィッツから「核兵器戦争論にいたるまで」すべて「人間的にきわめて貧しいものである」というから、これはこれまで見て来たローマ法王の論とは方向が違つている。ともすれば日本がこだわる国家意識とは別次元の世界である。これが堀田の読みである。

隊長カルマニョーラらの思いを知り尽くしているヴィスコンティが巧みに傭兵のフィリッポ・マリアの従妹の一人を嫁として与え、一四二二年度の戦争が終わると地中海第一の商港、ジェノーヴァの総督にし、「授爵もしてやつた」。ただカルマニョーラは、フィレンツェへの進軍の指揮を「直接執ることが出来なかつた」。それにミラノからは離れていなければならぬためにヴィスコンティ家内の、カルマニョーラに敵対する連中の情報に暗くなり、あげくは一四二四年「理由不明のまま」、ジェノーヴァ総督の肩書きを失つてしまふ。身の危険を感じたカルマニョーラは、妻子をミラノに放置したまま、生まれ故郷のピエモンテの山

中へ帰ってしまう。そして一四二五年二月二十三日、ヴェネツィアに帰って来る。ヴィスコンティの野心と内情の弱点をヴェネツィアの元老院にひそかに漏らし、元老院に受け入れられるが「本土側のトレヴィソに移って」戦争の準備をする。ヴェネツィアの北方のミラノが、カルマニョーラの暗殺を図る。「特に毒殺計画に関しては詳しい日程表までが残っている」と堀田は語る。ヴェネツィアとその間の都市国家フィレンツェの同盟が締結され、カルマニョーラはヴェネツィアの軍司令に任命され、「大聖堂で聖マルコの軍旗を授けられ」、「一千金ドゥカート」の給料を受けることになる。

カルマニョーラを手に入れたヴェネツィアは「最大限の勢力圏をえた」、しかしそれはカルマニョーラ力によるものではないと言う。早速、第一戦として「ミラノから東八十キロ」のブレッシアの町を狙うが、もともとヴィスコンティ家を嫌っていた町の住人が開城してしまった。カルマニョーラの働く余地がない。手持ち無沙汰のカルマニョーラは「嫌々ながら」共和国の許しを得て湯治に行き、五月に復帰して「貴族に叙せられた」とは。

以下、カルマニョーラは、元老院を手玉にとる。傷の治療と称して湯治に出かけ、その不在中に法王マルティヌス五世の仲介により、ヴェネツィア・フィレンツェ連合とミラノの間に平和交渉があり、それが成立。ひとえに法王マルティヌス五世の仲介によるとは、ローマ法王の力を見せつけるもので、ミラノはプレッシ

ア地方をヴェネツィアに譲り、人質にとられていたカルマニョーラの妻子をも不承不承、夫の手に戻す。無事落着きと思いの外、わずか「二カ月」で「戦争があるいはゲームが再開される」とは語り手としての堀田があきれ果てる思いである。カルマニョーラは以後、ヴェネツィアとミラノの両方を天秤にかけ、湯治と「傭兵隊のヴァカンス」と称して休戦。折りを見て動く。それを詳述することを避けるが、かれの巧みな駆け引き、身の進退に驚かされるわたくしである。

「さて平和の二年間が過ぎて、一四三一年、再び、例によってと言った方がよかろうが」、ミラノとヴェネツィアの戦闘が再開するが、静観して動かないカルマニョーラ。たまりかねた元老院が「進出」を命じ、カルマニョーラは「一カ月のみ」従うが、「十月に入」ると冬期休暇だと「軍を引き下げた」。続く第四・第五の命令を拒み、湯治に行く。しかもミラノとヴィスコンティ家の情報を元老院に送り続けていた。「黒衣の警官たち」が動き始め、(一四三二年の)三月二十九日、カルマニョーラに「即時召還命令」が下され、背く場合は「直ちに逮捕せよ」と付記されていたと堀田は語る。意外にもカルマニョーラは「四月七日」サン・マルコ広場の総督府に出向き、「官吏たちによって歓迎され」、カルマニョーラの意表をつき一人の貴族に監房へと引き込まれてしまう。「やられた……」と眩いたものの、五月五日、死刑の判決、ギロチンにかけられてしまう。しかし遺族の夫人には

一万金ドゥカート、二人の子息には各五千金ドゥカートを与える」と語り「寛大な処置であったと評される」と物語を結ぶ。

策謀家カルマニョーラがヴェネツィアとミラノの両方の天秤にかけられていることを知っている、そのかれを雇わねばならぬ総督府が、「決然たる態度を下」さねばならなかった。「狡智奸智の限りを尽くして精一杯生きて死ぬ」傭兵隊長だったと語るのが堀田である。この短編における「聖者」とはだれを指すのか。カルマニョーラで、その進撃としての「行進」なのか。話の言説と表題に隙間を感じる。

十四世紀後半から十五世紀以降、イタリアに対するフランス、さらにスペインまで、法王とも戦うヴェネツィアが、「海上国家、通商国家というよりも、すでにイタリア本土の諸国家の一つになって行くのである。語り手としての堀田は「かつて」、その地勢のために廃屋も見られるこのヴェネツィアの地に「住んで歴史の泥水にどっぷりとつかってみようか、と考えることがあった」といかにも堀田らしい。スペインに住んで『方丈記』や藤原定家の日記『明月記』を読む堀田であった。

イタリアをとりかむヨーロッパ諸国、そして東にトルコ、西にスペインなど、これらの王国に君臨しようと心がけるローマ法王、それに何よりも各王国が、イタリア内での各都市国家の王の対立が法王との関係もからまる。

六 「至福千年」を願う預言者の諦念

新全集の第八巻におさめる『聖者の行進』で、「酔漢」に続いておかれる「至福千年」はバルセロナで執筆、雑誌『すばる』の一九八四年六月号に掲載された。その出典として末尾にアルファンデリとデュプロンの「キリスト教団と十字軍の思想」(仏文)とコーンの「千年の至福」(英文)を掲げるが、その語りの文体から推して、堀田は現地に出かけたものと読める。

「予言者」と「預言者」とは、第一義的には別のものでなければならぬとするのが宗教学で、わたくしの理解として聖書学の第一歩として、伝わる神の子としてのキリスト自身の言葉を探り出そうとする。キリスト以前のユダヤ教系の多数の預言のほか、数々の神の予言、そして聖者の預言があった。悪魔やサタン、ユダヤ教系の諸説を閉じ込めていた千年は「聖徒の支配する至福千年、あるいは千年の王国」であった。キリストの昇天後、その予言を忠実に守ろうとした「預言者たちの、神の言ことばを預かっていた言」が「迫力にみち、あるいは呪力にみちている」と語る堀田は、「私は非信仰者として、長年にわたって新旧の聖書を読んで来た」と言う。キリストが受難して千年の後、サタンや聖徒たちの争いが始まる。そしてようやく聖なる都エルサレムが確立するのだが、主イエスの恩恵の到来を求めながらキリスト教とユダヤ教の終末論的な争いが続くと言うのか。

語り手の堀田の語りそのものが難解で、新全集の「聖者の行進」の、しかも異色の「酔漢」の次に置き、以下、キリスト教の聖者を語る冒頭に置くのは、おそらく堀田自身の戦略だろう。とにかく西暦以後、近現代に近いところへと宗教と政治を読み続けたようだ。

キリスト教徒の「聖なる都エルサレム」への思慕、しかも現実にはローマ法王が遠隔の地、神の光に満ちた光の都にあって、宮殿の荘厳をきわめることに専念した。「それは理論的解決としては賢明なものであったかも知れないが、王あるいは領主とその教会自体に搾取されていた人々にとっては納得の行くものではなかったであろう」と言う。「後には、ローマ法王自体が反キリストであるとする」極論までが出現する素地があった。それはキリスト教以前の「千年単位の農業社会」とは根本的に違うもので、この神を仰ぐ社会そのものが膨張し、人口も増大、巨大化する中で商工業が発達、商人が繁栄をきわめ、格差をつけられた貧者があえぐ。その混乱の中にキリスト教界では聖職者や重聖職的な存在が生み出される。この黙示録的な混乱の中に「奇跡を行う人は聖職者ではなく、ただの平民、あるいは教会から脱落した托鉢僧や、これも教会とは切れた隠者、行者であり得る可能性が増してゆく」とは、この後、登場することになった聖者の動きを語る序章になっているのかとわたくしは考える。

西暦一〇九五年、ローマ法王ウルバヌス二世の号令により「キリストの兵士」がエルサレムへ旅行、第一回の十字軍が始まる。

堀田善衛『聖者の行進』を読む(山下)

それは法王がトルコ族の侵入に手を焼き、キリスト教世界の統一、好戦的な貴族の争いを外に逸らす意図もあったと堀田は読む。その過程で民衆、一人の隠者、ピエールが「小預言者」となって登場、「性急さと激越」のゆえに「教会の司教や裕福かつ有力な市民」と対立、特にユダヤの迫害とイスラムの敵対を生み出し、その極点にナチ・ドイツが登場すると堀田は説く。とすれば、エルサレムへと行進する「聖者」とは、遅れをとる貧者で、かれらが貧しさを誇りにしながら、「至福千年」の再来を願い、しかも「貪欲の念々を排除」できない。何と、この十字軍を十三世紀の後半、七回までも数え、異教徒の撲滅によりキリスト教信仰の更新が行われ、ユダヤ人たちはシナゴークに閉じこもり、焼き殺されることになったと語る。源をローマ法王に発する、この貧しい求道を、「ある諦念をもって」「この作品を書いた」と言うのが堀田である。そして、これは堀田の体験、ペイルートからダマスカスへの山越えのバスに乗っていて「見たいものと願っていた」レバノン杉の森が現実には「一本しか見ることが出来なかった」。堀田が「一体どうしたのだ？」とつぶやくと、相客が「五百年ほど前に、ヴェネツィア人たちがみな伐ってしまったのだ」と言って閉じる。至福を願いながら、取り残される貧者が、法王ら裕福なヴェネツィア商人を横目に行進を続けると言うのだろうか。皮肉な苦笑と言うべきか。「行進」したのは、こうした貧しい人たちであった。

七 法王の座を篡奪するガエタニの生涯

『ある法王の生涯』はバルセローナで執筆され、『すばる』一九八六年五月号に掲載された。

「三十年ほど前」とは一九五〇年頃のことか、ローマを訪ねた代議士がローマ市内、修復中の遺跡や「廃社など」を「散々に見せられてホテルへ帰り、……案内してくれた若い同胞に、しみじみと……ローマは（荒廃から）復興したらんのと」ため息をついたと堀田は語る。おそらく世界大戦後の荒廃と見たのであろう。英語の諺に *When in Rome, do as Romans do*、「ローマにおいてはローマ人の行動通りに動け」と言う。これを日本語に訳せば、「郷に入らば郷に従え」となるようだ。西洋において、なぜイタリアのローマが、このような諺の素材になるのか。やはりイタリアの特殊性を周辺のヨーロッパ諸国が感じていたのだろうか。堀田の文体そのものが代議士旅行団の、ローマ法王とローマの歴史に無知であることを笑いとばすのであるが、実はわたくし自身が不勉強であった。

ベネディクト・ガエタ枢機卿兼法王庁法律顧問が一二九四年から一三〇三年まで実質八年間、ボニファティウス八世として法王の座にあった。実は、かれが法王に選出されるまで、「十八カ月を徒費し」た。その間、法王の座は空席、ヴェネツィアやフィレンツェの町が荒廢、盜賊や餓死者が続出していたことを、わが代

議士は知らなかった。「現在でもローマは人をして疲労させる都市である」と堀田は言う。ヘップバーンの『ローマの休日』とは、あまりにも違った世界だった。

ボニファティウス八世が選出される前、法王ケレスティヌス五世の法王選出に、法王を取り巻く大貴族の間の議論と陰謀、報酬工作が「蛭々三年にもわたって取り引きと陰謀に明け暮れ」していたと言う。これが当時のローマの現実であった。

イタリアを構成する都市国家としての各国の王の間の対立、しかも「南方からはイスラムの勢力」、それにフランスと英国の対立がキリスト教世界を二つに割るかも知れぬ戦争を始め、教会領であるシチリア島は、スペイン人たちによって占領されかけていた。そこへ一人の枢機卿、俗名ベネディクト・ガエタニが登場する。かれは、モローネ山に名声を避けて苦行を続ける老人ピエトロを訪ね、聖霊の声だ、そなたを法王に推挙すると宣言したものだから大変。仙人ピエトロは、八十歳を超えていた。ガエタニは痛風と胆嚢結石を持ちながら六十歳になったばかりで、「いつかは自分のところへ（法王の）玉座が転がり込んで来るものと決めて込んでい」た。会議の決定をピエトロに報せる使者として「ただ一人英国から来ていた」枢機卿が「仰々しい法衣をまとい岩山を汗まみれになって攀じ登り」「乞食浮浪民の小屋」に着いてみれば、何と先客としてナポリ王カルロの一行が着いていた。ピエトロを法王の座に着かせ、わが思いのままに操縦しようとしていた

のだった。世俗の王もしたたかなもの、そこへ、前に使者として
 発った枢軸卿が登場、おごそかにラテン語で就任を依頼すると、
 襤褸をまとった老隠者が「かすかな、ほとんど誰にも聞き取れな
 いような小声」で、法王就任を承引する旨を答えた。

したたかなナポリ王が、八十余歳の新法王を「驢馬に乗せて」
 警護して山を下り、「ローマならぬ、みずからの首都ナポリに留
 め」ようとす。当然、教会側と王が対立、打って出るのがガエ
 タニ。ナポリ王をくどいて「ローマよりや、北方の」ラキラで即
 位の戴冠式を行う。即位式をおえたケレスティヌス五世が法王の
 座をナポリに置く。ナポリ王の指示に従ったもの。ガエタニは、
 激怒するが何とか怒りを抑える。新法王は途方に暮れ、あらゆる
 政策を放棄、白紙委任状に署名するのみ。群がり集まる猟官運動
 者。この混乱を利用しようとするナポリ王カルロは、フランスの
 アンジュラ家の子息であったために七人のフランス僧を枢軸卿と
 して新任。次の法王を選出する会議は、フランス人とイタリア人
 によって構成される。困惑するケレスティヌスに「秘密の伝声
 管」を取り付け、連日辞任を迫ったのが、ガエタニであった。老
 法王は、表向き中立を守っていたガエタニの執政に頼る。戴冠式
 後、わずか十五週にして、枢軸卿会議を招集、法王は「青ざめ
 て、身をぶるぶる震わせながら」、ガエタニがラテン語で起草し
 た「法王権放棄承認書」を読み上げ、もとの隠者の粗衣をまっ
 て山へ戻ってしまった。この辞任式の十日後に、法王選出会議

堀田善衛『聖者の行進』を読む(山下)

は、「わずか二十四時間の協議と投票の結果」、このベネディク
 ト・ガエタニ卿が一九四代目の法王として選出され、ボニファ
 ティウス八世を称したとして、第一章をおえる。枢機卿会議は問
 題の隠者上りの「ケレスティヌスを列聖し、聖ケレスティヌス
 五世」と称した。うまく利用された元隠者のケレスティヌス五世
 については、歴代教皇表を見ると、一二九四年の着任と記録され
 ながら、在位は空白、一二九四年から一三〇三年まで在位したの
 はボニファティウス八世と記録される。

第二章、野心に満ちた俗物の財政家ガエタニは、かねがねロー
 マの心臓部にあつて、外交使節団としても英国を始め、フラン
 ス、ドイツの各地に収入源を持っていた。ここで新法王ボニファ
 ティウス八世が法王の座に着くまでの四十年間の苦勞を回想す
 る。もともと法王と縁戚関係にあり、英国へ法王の使者として立
 つが、その間、仏・英両国に収入源を増やし、パリ大学に脅しを
 かけ、一方でひそかにナポリ王の支持をもとりつけていた。

以下、何と四章にも亘って、その経過を語り続けるのが堀田で
 ある。

法王の座に着くのに前法王、例の仙人ピエトロを同行、道中逃げ
 出すのを逮捕状を出して逐う。比較的安定した治世の中にも、前
 法王を核とする反乱が起きるのを怖れたからで、ついに逮捕し、
 地下牢に閉じ込め死に追いやる。実は殺害したとの噂があつた。

さてその豪華、盛大な戴冠式から豪華な饗宴、しかも奇妙な

穴のあいた便器のような椅子に座ったことには、何か性の匂いも立ちこめる語りである。

外に向かつては旧名ガエタニの名で英仏両王家に仲裁の労をとったが「貪婪は底なし」。イタリア国内で聖職売買と蓄財。フィレンツェの諸銀行に「神様殿」名義の口座を設けた。ただ困ったのが法王の職が世襲でなかったこと、そこで有力な枢機卿コロンナ家に対し、その若者が金貨強奪事件を引き起こしたのをチャンスとばかり枢機卿を破門、あげく「十字軍による征討令を発した」。「口の悪いことにかけてはとびきりの」人物であったダントから「篡奪者」と批判された訳である。

フィレンツェの銀行がイタリアの各国を始め英・仏・スペイン・ドイツなどの国の政府の徴税業務、百年に及ぶ英仏戦争の戦費調達を行い、ヨーロッパ各国の特命大使の大半がフィレンツェ人であった。ボニファティウスはフィレンツェ出身の各国大使にフィレンツェが「地・水・火・風」に次ぐ「第五要素」だと持ち上げながら、そのフィレンツェ人の共和思想を警戒、同じく共和制を怖れる貴族たちを煽って、皇帝や法王こそ共和制を越えると言つて、フィレンツェに脅しをかけた。

ダントや枢機卿を通して見たボニファティウスは、内的な神秘性といった神よりも権力を重視。枢機卿ランドルフによれば、「腐っている」、その法王は病状から神を呪った。そして凶状持ちの怪人アルノドの怪しげな医術により健康を保った。ユダヤ教哲

学に基づく印章を捺した下帯や印章、指輪を着用した。一三〇〇年祭、大衆の集まる群衆の行進と巨額の賽銭。みずからを皇帝と称し、剣と十字架を身につけた。

フランスのフィリップ王四世は、増税により王宮を飾り立てた。金銭の持ち出しを禁止するが、それを抑えようとする、国籍を超えた法王が対立。法王にとって外国は存在しない、その法王が国王に破門を示唆して牽制。一三〇三年両者の抗争となる。法王は破門をちらつかせて司教たちを招集、対する国王は総三部会を招集。「聖俗の双方に相渉つて法王は絶対君主である」。王のために法王と対決するコロンナ家のシアーラ・ディ・コロンナ。おりからの熱風と崩壊に苦しむローマの人々。パレストリーナの南、アナーニ(ガエタニの生地)に避暑していた法王。王をキリスト教社会から追放、破門通告を用意していたが、コロンナ家のシアーラと王の顧問ノガレが早朝奇襲、法王を捕らえるが処理できない所を、アナーニの市民が決起、シアーラを追い出す。助かった法王も権力は失墜、法王からガエタニに戻つてしまつて、最後のローマ法王は死去する。

人民と、その上に立つ者は「引き裂かれ」る運命にある。フィリップ四世の支配下、従順なフランス人クレメンス五世は「一生フランスにあつて、ローマには一歩も足を踏み入れなかった」。教会の分裂、アヴィニオン法王は、フランス国民国家の王の下、「教会の行財政担当長官の如きものになつてしまつた」。ローマの

荒廢は、ついに恢復不可能なものとなって行った。ポニファティウスの遺体に対する「異端審問は、判決に到らなかった」と法王伝を結ぶ。

八 結び

かねて『方丈記』を現代体験に重ねて読んでいた堀田善衛は、一九七七年の夏、スペインへ旅と言うよりは「移住」を敢行、時々帰国しながら十年間、スペインを拠点にヨーロッパを旅した。バルセローナの地でローマ法王を軸に、カトリック信仰について五篇の短編を移住以前に書き、全集再編の過程で総合表題とする「聖者の行進」を加えて一九九三年刊行の新版全集の第八巻に、一九七一年に書いていた「酔漢」をも取り込み都合七篇の短編を『聖者の行進』としてまとめた。カトリックに関する物語は、時代の古い話から並べたものか。

キリスト教とは無縁の「酔漢」をどうして『聖者の行進』に取り込むのかを考えるのが本稿で、そのために、わたくしには不勉強のカトリックキリスト教をめぐる堀田の読みを、難儀しながらわたくしなりにたどったのであった。

結論として、堀田の思いとしては、原則、「聖者」はキリスト教の預言者であるはずのローマ法王を指し、「行進」の主体は、身分が低い、その貧しさのゆえに聖者に従う、しかも奇人とも

言うべき人々であったと読む。

その法王がローマを拠点に、イタリアを構成する都市国家としての、ナポリなど各国の王との対決の中に、宗教を介しての政治の実態を読み、ポニファティウスの死を見届け、コメディータッチで語るのが堀田であった。その文体が堀田文学の命であることを改めて痛感する。

問題のわたくしのためにつまずきのきっかけとなった「酔漢」を『聖者の行進』に取り込んだことについてはわからないというのが、結論である。あえて言えば、法王と国王の対立の中に政治を考えることが、『平家物語』の中でも癖のある『源平盛衰記』を引き込ませたと考える。カルマニョーラについてもすっきりしない。作者の主体性を重視する堀田は、数々の借り物を持ち込む『平家物語』を好まない。

堀田が生まれた越中、伏木の地は、浄土真宗の一大拠点である。そうした地での堀田とカトリックとの出会いがいかなるものであったかも考えねばならないと思いつつ、本稿を閉じる。

拙い思考の経過に発表の場を提供してくださる文学部教授会、それにわれわれとの仲介を果たしてくださる文学部図書室のスタッフの皆さんに感謝して筆を擱く。

キーワード…ローマ法王、イタリアとフランス、スペイン、酔漢、ギンズブルグ

Abstract

Why did the new edition put “Drunken” into the “Marching Saints”?

Hiroaki Yamashita

I am very sorry that I didn't know the new edition had included “Drunken” in the 8th volume. I wondered if it is right, I could not think so.

The question was the reason, why the new edition put the “Drunken” in the “Marching Saints”. I tried to think about the reason. It is very difficult to answer the question. It is the Hotta's problem about nation and religion.

Keywords: Roman pope, Italy and France, Spain, Drunken, Carlo Ginzburg